

三島由紀夫『愛の渴き』における語り手の顔出し

高野 敦志

1. はじめに

文体論という研究分野を開拓した小林英夫は、小説のテキスト内で、作中人物に帰することができない判断を、作者の判断がテキスト上に現れたものと考え、「作者の顔出し」と呼んでいる¹⁾。しかし、小説はあくまでも虚構のテキストであり、小林の「作者の顔出し」という用語は、樺島忠夫が唱えたように、「語り手の顔出し」と改めるべきである。樺島は「語り手の顔出し」を指標の強弱に基づいて、単語レベルから文レベルへと5段階に整理している²⁾。

しかし、樺島の「語り手の顔出し」は概括的な枠組みを示したものである³⁾。また、樺島は「語り手の顔出し」の中に、「作者」や「作品中に設定される語り手」、「非人称の目を持つ注釈者」を含めているが、本研究では「語り手の顔出し」を、「非人称の目を持つ注釈者」による「非人称の眼による叙述」に限るものとする。「作品中に設定される語り手」が語りの中で顔出しするのは「無標」であるのに対し、語り手が非人称化する「三人称小説」において、語り手が「物語世界」に顔出しする現象こそ「有標」だと考えられるからである。

では、非人称化したはずの語り手が、あえて「物語世界」に顔出しするのはな

ぜだろうか。読み手が作中人物に「同化」し、その視点（視座）から「物語世界」を鑑賞することで、作品の深い理解につながるはずなのに、あえて顔出しするのはなぜか⁴⁾。この問題を解決するためには、文学テキストの一部ではなく、一作品全体を調査する必要がある。

2. 調査の目的及び方法

本研究の目的は、語り手が非人称化する「三人称小説」において、語り手が顔出しする表現の実態とその理由を、作品の表現との関わりから明らかにすることである。

なお、調査対象とする作品としては、「三人称小説」のうち、「非人称の目を持つ注釈者」による「非人称の眼による叙述」が多く現れ、語り手の顔出しが強弱にわたって認められるものを選定する必要がある。また、用例を多く収集するには、作品の規模が小さいものでは難しい。

上記の条件に合致する作品に、三島由紀夫の「愛の渴き」がある。資料としては、新潮社版『三島由紀夫全集』第4巻（1974）所収の「愛の渴き」を用いることにする。この作品は三島の他の「三人称小説」と同様に、「三人称全知の視点」に相当する⁵⁾。語り手からのコメントや注釈がきわめて多く、単一の作品における「語り手の顔出し」を、全体像の形で提示

するには最適である。調査にあたっては、地の文のみを用いることにし、助詞、助動詞などの付属語レベルから、感嘆や疑問など文レベルの用例を挙げて、顔出しの程度を調査する。その際、先述した樺島の「語り手の顔出し」の指標を参考にした。これによって、「語り手の顔出し」という現象が、実際の文学作品にどのように現れるか、具体的に提示することが可能となる。

3. 分析の結果

ここでは理解しやすいように、まず分析結果を示し、次に各項目の例文を提示して、説明を加えていくことにする。図1は「語り手の顔出し」の分析結果であ

る。「語り手の顔出し」の弱いものが下に、強いものが上に並べてある。() 内の数字は引用した用例の番号である。その判断基準を以下に示す。第一に「語り手」が潜在するかしないかで二分した。文の主語が作中人物や事物である場合を、「語り手が潜在」とし、文の主語が「語り手」であると考えられる場合、「語り手が顕在」とした。第二に「読み手への働きかけ」の有無で二分した。第三に「価値判断」の有無で二分した。第四に「語り手の顔出し」は、付属語よりは文において強く、文においても、平叙文よりは感嘆文の方が強いとした。以下に具体例を示して分析を進めていくことにする。

強	b-b	読み手への働きかけがある	(21)
	b-a	読み手への働きかけがない	(19) (20)
↑	b	語り手が顕在……文の主語が語り手であると考えられる場合	
	a-b-e	自問	(17) (18)
語	a-b-d	反語	(15) (16)
り	a-b-c	文末表現による情況説明	(12) (13) (14)
手	a-b	読み手への働きかけがある	
の	a-a-b-e	感嘆文で感情的側面を示す	(10) (11)
顔	a-a-b-d	肯定文(否定文)の命題に示される	(8) (9)
出	a-a-b-c	文頭および文中……副詞および形容動詞連用形	(6) (7)
し	a-a-b-b	文末表現……助動詞および複合助動詞	(4) (5)
	a-a-b-a	接続表現……接続詞および接続助詞	(2) (3)
	a-a-b	価値判断がある	
↓	a-a-a	価値判断がない	(1)
	a-a	読み手への働きかけがない	
弱	a	語り手が潜在……文の主語が作中人物や事物である場合	

図1 「語り手の顔出し」の分析結果

a 語り手が潜在

a-a 読み手への働きかけがない

a-a-a 価値判断がない

- (1) 悦子は妊婦のやうな歩き方をする。誇張したけだるさの感じられる歩き方をする。彼女自身はこれを意識してゐなかつたし、注意して矯める人もなかつたので、その歩き方は、悪戯小僧が友だちの衿首にそつとぶらさげる紙のやうに、彼女の強いられた目じるしになつた⁶⁾。

人物の単なる外面描写のみなら、ビデオで撮影した映像と同様に、そこに語り手の眼は感じられない。下線部には人物の心理まで観察している語り手の眼が感じられる。語り手は悦子自身以上に彼女の心理を理解しているのである。価値判断が示されていない点では、「語り手の顔出し」の中ではもっとも周縁的なものである。文法的指標ではないが、対象を観察する語り手の眼は感じられる記述となっている。

a-a-b 価値判断がある

a-a-b-a 接続表現……接続詞および接続助詞

- (2) 杉本家の電話はすでにベヒシュタインのピアノと共に売られてゐた。電報が電話に代つて、大阪からのさして急を要しない用件にも使はれた。杉本家の人たちは深夜の電報にもおどろかない。

しかしこの電報をひろげてみた彌吉の顔には喜色が充ちた。差出人の

宮原啓作は国務大臣である⁷⁾。

接続詞は文と文の論理的関係を示すものであり、前後の文の関係が逆接であることを、語り手は明示しているわけである。「しかるに」「ところが」「とはいふものの」などの逆接が多く用いられている。小説文においては、接続詞は省略してしまつて、文と文の関係を読者の推測に任せる場合が多い。

- (3) 軽い脳貧血だつたが、医局で暫時の休養を強ひられた⁸⁾。

夫良輔の看病疲れで失神した悦子の状況を説明している部分である。「が」「けれども」「ても」などの接続助詞は、節と節の論理的関係を示すものであるが、「くせに」などのような非難のニュアンスを伝えているものを除けば、語り手の存在は見過ごされてしまうことが多い。

a-a-b-b 文末表現……助動詞および複合助動詞

- (4) が、一向それは息子や妻が期待したやうな別荘らしい有閑生活の根據地とはならず、家族を従へて週末ごとに大阪から自動車であつて、日光に親しみ畑いぢりをたのしむための足がかりとなつたにすぎなかつた⁹⁾。

悦子の舅、杉本彌吉が米殿村に移ってきた経緯を説明している部分である。「にすぎなかつた」という文末表現を加えることで、示された事実に低い評価を与えている。事実を記述した部分に、語り手の評価が付け加えられている形で

ある。文末まで目を通した段階ではじめて、読み手は語り手の評価や判断に気がつく。文の命題に陳述が付加されている例としては、「筈がない」「かもしれない」「らしかった」「にちがいない」など、彌吉や悦子をはじめとする登場人物の心理を語り手が断定せず、推測する表現が目立った。

- (5) 悦子は耳もとで、焼かれた竹が炸裂する爽やかな音をきいた。どんな不快な響きも、今の彼女の耳には爽やかに聞かれたであらう¹⁰⁾。

波線部は物語が現在進行していることを示す直示表現である。下線部は語り手の立てた仮定に対する推測である。「全知視点」に立つ語り手は、現在進行中の登場人物の知覚に関してさえ言及することがある。

a-a-b-c 文頭および文中……
副詞および形容動詞連用形

- (6) なかんづくかういふ夜なべ仕事の際の謙輔の迷惑顔は見物である¹¹⁾。

文頭に来ている点では接続詞と似ているが、副詞の場合には文中の語句を修飾する。「なかんづく」によって、「かういふ夜なべの仕事の際の謙輔の迷惑顔」を取り立てているのは、語り手であると考えられる。なお、波線部を含めた文全体は、語り手の価値判断が「肯定文(否定文)の命題に示される」例に該当する。

- (7) 彼女は死ぬまで良人が手浹をかむこ

とを禁じ、人前で鼻くそをほじくることを禁じ、舌鼓を打つてスープを啜ることを禁じ、火鉢の灰に痰を吐くことを禁じた。これらはむしろ社会の寛容に委ねられれば、豪傑肌の愛称のよりどころにもなりうる悪癖の数々である¹²⁾。

悦子の舅、彌吉の亡妻の彌吉に対する態度を語り手は説明している。「むしろ」という副詞の中に、より適切な表現を提示しようとする語り手の存在が感じられる。ここでは副詞は文中に挿入されている。同様の例としては、「恐らく」「どうやら」「いわば」や、形容動詞の「明らかに」などがある。

a-a-b-d 肯定文(否定文)の
命題に示される

- (8) こんな彌吉を鼻持ちならないものに考へてゐた長男の謙輔が、却つて誰よりも早く父親のもとへ身を寄せる成行になつたのは皮肉である¹³⁾。

分裂文で文末に価値判断を示す表現が現れた例。助動詞や複合助動詞と同じ位置に語り手による判断が示されている。

- (9) 「あなたの俳句と来たら、月並俳諧の最たるものね」
……こんな調子の、地面から四五寸足の浮いたやうな会話が永々とつづいたが、一貫した感情の主題がそこにあつて、その主題といふのは、千恵子が良人の「学識」に捧げてゐる限りない尊敬の念であつた。二昔前

の東京のインテリにはかういふ夫婦がめづらしくなかつたものである¹⁴⁾。

謙輔の嫁、千恵子が良人に感じている思いを述べた後、語り手は下線部で時代背景について説明している。「ものである」は当時の習慣を示している。その他に、語り手の人生観を表すものなどがある。

a-a-b-e 感嘆文で感情的側面を示す

- (10) 良輔の心得てゐる甘つたれた女を喜ばす四十八手の一つにすぎない。……ただあのとき、良輔は本気で悦子を喜ばすつもりだつた。本気でこの新妻を騙るつもりだつた。何といふ誠実¹⁵⁾。

語り手は良輔の内心を説明した後、良輔に対して皮肉混じりに感嘆の声を上げている。文で価値判断を示すだけではなく、感情的側面が加わっている点で、語り手の存在はより前面に感じられる。

- (11) 良輔の熱病が、再び二人を二人きりの孤独に置いた。悦子は思ひがけなく彼女を再び訪れたこの無慙な幸福を、何と残る隈なく、何と貪婪に、何といふあさましきで享樂し尽したことであらう¹⁶⁾。

語り手は悦子の心理状態を、外側から観察し、驚きの声を上げている。

a-b 読み手への働きかけがある

a-b-c 文末表現による情況説明

- (12) 大阪へ出て来ても、阪急終点の百貨店で買物をすませて、そこから踵を返して、また電車に乗つてかへるだけである。映画も見ない。食事はおろか、お茶を喫むでもない。街の雑踏ほど悦子のきらひなものはなかつたのである¹⁷⁾。

語り手は「のである」を用いることで、読み手に悦子の行動の理由を説明している。「のである」は文法的に省略可能だが、その場合、文と文の連関が希薄になり、因果関係を読み手に推測させることになる。

- (13) 悦子は、この最後の一夜に、形式上の秘密にもあれ、秘密を持ちたいのだ。三郎との間に、最初で最後のものかもしれない秘密を持ちたいのだ。三郎と秘密を頒ちたいのだ。三郎がつひに彼女に何一つ与へてくれぬにせよ、彼からこの些か危険でないこともない秘密を与へてもらひたいのだ。それくらゐの贈物は、是が非でも彼から要求する権利を、悦子は感じるのだ。……¹⁸⁾

悦子の心の動きを、語り手は悦子の身になって共感的に示している。「のである」に改めると、高みから悦子の心理を説明している印象が強まってしまう。

- (14) それからの二時間ちかくを、悦子は闇のなかで、おそろしい待ち遠し

さですごした。この焦慮と徒らな熱い夢想とは、三郎とのあひびきを無限に喜ばしいものに思ひ系がかせた。彼女は三郎に憎まれたいための告白のおつとめを、恋心に浮かされて祈禱を忘れる尼僧のやうに忘れるのであつた¹⁹⁾。

「のであつた」「のだった」は、詠嘆を表す文語の「けり」に相当すると言われる。ここで語り手は悦子の心の動き（波線部）に共感しているため、説明調の「のである」を用いる代わりに、詠嘆の「のであつた」を用いている。

a-b-d 反語

- (15) 良輔はやさしい微笑を髭だらけの頬にうかべて、(こんな微笑を彼が悦子に見せたことが一度でもあらうか)、息をはずませながら、かう言つた。

「この病気を、君にうつしてやれないのが残念だ。君なら、僕より十分持ちこたへる²⁰⁾」

括弧内は語り手による注釈である。形は疑問文であるが、反語で否定的見解を述べている。語り手が見解を述べてしまっているので、読み手はそれを受け入れるしかない。

- (16) しかし彼のあの柔らかな甘い猫のやうな弁解、舌たるい大阪訛りを故意にまじへた、彼のあの丹念に煙草の火を灰皿にねじ伏せて消す仕草を思はせる弁解にまして、悦子の苦しみ

を増すものがあらうか²¹⁾。

亡夫良輔に対する悦子の印象を、語り手が説明している箇所である。形式的に疑問文の形を取っているだけで、反語として否定的な見解を語り手は述べている。ただし、波線部のように、イメージの共有を示唆する「あの」という連体詞から、悦子の視点（視座）から述べているという印象も与えており、語り手と登場人物の視点（視座）が重なり合っていることが分かる²²⁾。

a-b-e 自問

- (17) あの光りを浴びた時、彼女は何を感じたのか？ 解放をか？ 嫉妬からの、眠れないあまたの夜からの、突発的な良人の熱病からの、避病院からの、すさまじい深夜のうはごからの、臭気からの、死からの²³⁾。

語り手が断定的な評価を下さず、自問自答する形で悦子の人物像を明らかにしようとする。衝動に突き動かされている主人公の内心は、外側から推測するしかない。語り手はその謎解きに読み手を誘っているとも考えられる。疑問を多数示すために、倒置文が用いられている。

- (18) あの晩の一時に彌吉が繕ひ物をしつゝ悦子の部屋へ入つて来て、パイプを吹かしながら、悦子がよく眠れるかどうかをたづねたとき、彼女は何を感じたのか？²⁴⁾

ここでも語り手は、悦子の内心を読み

手に推測させようとしている。

b 語り手が顕在……文の主語が語り手であると考えられる場合

b-a 読み手への働きかけがない

- (19) 悦子の指はそれに触れたいとひたすらにねがつた。どういふ種類の欲望かはわからない。比喩的にいふと、彼女はあの背中を深い底知れない海のやうに思ひ、そこへ身を投げたいとねがつたのである²⁵⁾。

波線部の「それ」は三郎の背中である。2番目の波線は、「どういふ種類の欲望かは(悦子の指には)わからない」という意味である。下線部で語り手は、悦子の心中を喩える表現を模索している。その文の主語は「語り手」であると考えられる。日本語では主語が省略されることが多いからである。

- (20) 医院は代替りをして、若い医学士が院長である。縁無眼鏡のこの軽薄才子は、死んだ父親や親戚一統の田舎者氣質を嗤つてゐたが、杉本一家の別荘人種氣質だけは目の上の瘤なので、道であふと猜疑心をちらつかせた愛想のよい挨拶をした。何の猜疑心かといふと、銀流しの都人士氣取りを見破られはすまいかといふ猜疑心である²⁶⁾。

語り手が説明を付加している例である。波線部の「猜疑心」を受けて、「何の猜疑心かといふと」と反復する形で、語り手は「猜疑心」に説明を加えている。

b-b 読み手への働きかけがある

- (21) この瞬間における悦子の諦念を、もしくは単なる自墮落を、安逸を、どう解釈すべきであらう²⁷⁾。

下線部の主語は省略されている。語り手もしくは一般的な「人」を示していると思われる。登場人物に対する分析に、読み手を誘っていると見られる。

4. まとめ

4.1 「語り手の顔出し」の指標

ここまで三島の「愛の渴き」を資料にして、「語り手の顔出し」の弱いものから強いものまで例文を挙げて説明した。3の図1において、すでに分析結果は示してあるが、表1は「語り手の顔出し」の特徴のうち、実際に現れた例を、改めて表の形に整理したものである。

4.2 語り手の潜在と顕在

「語り手が潜在」する場合は、主語が作中人物や事物であるのに対して、「語り手が顕在」する場合は、文の主語が「語り手」であると考えられる。ただし、日本語で書かれた小説では、「語り手」を示す主語は省略され、明示はされないのが一般的と考えられる。語り手が顕在する例が乏しいのは、語り手の存在が、物語の世界に読み手が感情移入するのを妨げるからである。

4.3 読み手への働きかけの有無

読み手への働きかけには、①文末の「のだ」「のである」で、状況や因果関係を語

語り手	語り手への働きかけ	価値判断	単位	特徴	文型	出現数
顕在	ある	ある	文	疑問文。読み手への問いかけを含む。	b-b	2
顕在	ない	ない	文	肯定文。主語が語り手であると推測される。	b-a	2
潜在	ある	ある	文	疑問文。自問。読み手への問いかけを含む。	a-b-e	35
潜在	ある	ある	文	疑問文。反語。形式は疑問文だが、内容は否定的見解。	a-b-d	22
潜在	ある	ある	語	文末の「のだ」「のである」「のであった」	a-b-c	159
潜在	ない	ある	文	感嘆文。語り手の感情が付加。	a-a-b-e	4
潜在	ない	ある	文	肯定文(否定文)の命題に示される。	a-a-b-d	108
潜在	ない	ある	語	文頭・文中の副詞、および形容動詞連用形。	a-a-b-c	17
潜在	ない	ある	語	文末の助動詞、および複合助動詞。	a-a-b-b	51
潜在	ない	ある	語	文と文を結びつける接続詞。語と語を結びつける接続助詞。	a-a-b-a	20
潜在	ない	ない	文	人物の内面を記述。文法的指標なし。	a-a-a	14

表1 「語り手の顔出し」の特徴

り手が説明する場合、「のであった」で詠嘆をさらに付加する例がある。②反語によって疑問文の形で問いかけながらも、実際には否定的見解を示す例がある。③自問の形で語り手が断定的な評価を下さず、人物に対する分析に読み手を誘う例がある。なお、「作中人物の眼による叙述」の場合なら出現可能な呼びかけ、さそい、あいづち要求、判定要求、指令などは見られなかった²⁸⁾。

4.4 価値判断の有無

登場人物の内面を記述しているだけでは、語り手の価値判断は認められない。価値判断が認められる例としては、①接続詞が文と文の論理的関係を、接続助詞が節と節の論理的関係を明示している。②文の命題に下接した助動詞や複合助動詞などの陳述に語り手の価値判断が示されており、これらは文末に読み進めるまで読み手に気づかれない。③文頭及び文中の副詞や形容動詞連用形は、文中に含まれているために、文を読む過程で読み手に気づかれる。④肯定文、否定文と

いった文単位で語り手が評価を下す場合、価値判断は文の命題の一部に組み込まれている。⑤感嘆文によって、語り手の感情まで読み手に感じられるようになる。

なお、語り手と登場人物の視点(視座)が重なり合っていたり、語単位の指標が文単位の指標に包含されることが少なくない。

4.5 「愛の渴き」の特徴

①主人公の悦子自身が理解していない心理を語り手が説明している点、語り手が価値判断を多く示している点、語り手自身が人物に感嘆している点、読み手への問いかけや「語り手」を主語にすると考えられる文の存在など、語り手が作品の外部から介入する例が非常に目立つ。

②「視点人物」の知覚や内面を描写するなどの「人称制限」の違反は、語り手が非人称化することで可能になったと考えられる。非人称化したはずの語り手が、一人の人間として、作中人物など

に評価やコメントを加えたり、問いを発したりすることは、非人称化に反するばかりでなく、読み手が「物語世界」に仮想的に没入することを妨げかねない。一方、「愛の渇き」の主人公の悦子のように、衝動的に動く人物を描く場合、その内心は悦子自身にも十分把握されておらず、語り手は自己の見解を述べて説明を付加する必要がある。また、読み手に疑問を投げかけることで、物語への参加を促し、人物に対する謎を一緒に解くという形で、語り手は読み手と同じ目線に立とうとしている。

- ③「三人称全知の視点」の小説においては、語り手はすべての人物の心理を理解し、事実関係を一方的に読み手に説明する傾向が見られる。作品の世界を理解する上で、読み手は語り手に対して受け身の立場に立たされがちである。「愛の渇き」は全知の視点に立ちながらも、語り手自身が読み手と同じ目線に立つことで、読み手の想像力が展開する余地を残している。

5. おわりに

以上、「語り手の顔出し」という現象が、実際の「三人称小説」ではどのように現れるのか、三島由紀夫の「愛の渇き」を資料にして整理した。「語り手の顔出し」の強弱、およびその判断をする際の指標についてもまとめた。

本研究の意義は、樺島の提唱した5段階の「語り手の顔出し」を、一作品の全体を調査することで階層的に提示し、より詳細な構造を明らかにした上で、語り手が顔出しする原因についても明らかにしたことである。これによって、「語り手の

顔出し」が読み手の作品理解にいかなる効果を与えるかという側面からの研究が進むことが期待される。

今後の課題は、「語り手の顔出し」という現象について、他の文学作品を調査することで、その妥当性を検証していくことである。

注

- 1) 小林英夫「文章研究と文体論」『小林英夫著作集6』、みすず書房、1976、p.196
- 2) 樺島忠夫「文体・表現特性をとらえる手がかりについて」『表現学考』今井文男教授還暦記念論集刊行委員会、1976、p.221
- 3) 語り手の「物語世界」への関わりについて、甲斐睦朗は『源氏物語の文章と表現』の中で、「人物の心情に関係しない純粋な語り手の表現」から「語り手の一切関係しない純粋な人物の表現」までの表現分類を試みている。
- 4) 宮崎清孝は『視点』の中で、作中人物に設定された「視点」から見えるさま「見え」を作品理解の鍵ととらえている。
- 5) 西郷竹彦は『文芸学講座（I）視点・形象・構造』において、三人称小説を「三人称客観の視点」「三人称限定の視点」「三人称全知の視点」に分類している。「三人称全知の視点」は、ジェラルド・ジュネットの『物語のディスコース』の分類では、「異質物語世界的な」焦点化ゼロの物語言説」に相当する。
- 6) 三島由紀夫『三島由紀夫全集』4、新潮社、1974、p.177
- 7) 同、p.249
- 8) 同、p.223
- 9) 同、p.179

- 10) 同, p.282
- 11) 同, p.226
- 12) 同, p.181
- 13) 同, p.182
- 14) 同, p.273
- 15) 同, p.208
- 16) 同, p.208
- 17) 同, p.173
- 18) 同, p.361
- 19) 同, p.362
- 20) 同, p.218
- 21) 同, p.204
- 22) 宮地裕「文章論の視界」『国語学と国語史』, 明治書院, 1977, pp.1023-1037
同論文の中で、宮地は小説における重層的な「視点」のあり方を示している。
- 23) 三島由紀夫『三島由紀夫全集』4, 新潮社, 1974, p.203
- 24) 同, p.229
- 25) 同, p.285
- 26) 同, pp.288-289
- 27) 同, p.230
- 28) 注2参照

参考文献

- 糸井通浩「表現の視点・主体」糸井通浩・半沢幹一〔編〕『日本語表現学を学ぶ人のために』所収, 世界思想社, 2009
- 甲斐睦朗『源氏物語の文章と表現』, 桜楓社, 1980, p.37
- 樺島忠夫「文体・表現特性をとらえる手がかりについて」『表現学論考』, 今井文男教授還暦記念論集刊行委員会, 1976, p.221
- 小林英夫「文章研究と文体論」『小林英夫著作集』6, みすず書房, 1976, p.196

- 西郷竹彦『文芸学講座（I）視点・形象・構造』西郷竹彦文芸・教育全集14, 恒文社, 1998
- 野田春美『「の（だ）」の機能』くろしお出版, 1997
- 宮崎清孝・上野直樹『視点』, 東京大学出版会, 1985, pp.105-128
- 宮地裕「文章論の視界」『国語学と国語史』, 明治書院, 1977, pp.1023-1037
- 山岡實『語りの記号論 増補版』, 松柏社, 2005
- Genette, Gérard *Discours du récit in Figures III*, éditions du Seuil, 1972 (花輪光・和泉涼一訳『物語のディスコース』, 水声社, 1985)
(早稲田大学非常勤講師)